

「JNTOの失われた時を求めて」座談会①

参加者：川井仁史、稲場彰（紙面参加）、山之内保、吉沢新一（紙面参加）、塩沢潔、石井昭夫

この座談会には終わりがありません。新しい紙面参加者（寄稿やインタビュー）による追加情報を記載したり、記載済情報についても適宜加除訂正を行なって行きます。



石井 今日ではJNTO 最古参の先輩諸氏に入社時代の話をお伺いしたい。（財）国際観光協会と（社）全日本観光連盟が一緒になって特殊法人日本観光協会（英文名 Japan Tourist Association：JTA）になったのが1959（昭和34年）4月1日で、この年からJNTOの組織・事業が拡大して行きます。大卒定期採用も始まって、その第一期生が川井さんと稲場さん。翌1960年に山之内さんと松本常雄さん、その次の1961年に吉沢新一さんが一人だけ、そして1962年に私たち小方、塩沢、石井が入りました。

入社 of 動機・経緯

石井 川井さん、JNTOに入社する動機は何だったんですか。（特）日本観光協会の存在は入る前から知っていらっしゃいましたか。

川井 前年に就職活動していた時はまだ（財）国際観光協会だった。われわれの頃は今と違って、夏休みが終わり、9月になったから就職活動しなくちゃいけないな、っていう感じだった。文系は就職が難しい時代だった。外国に行きたいと思っていたからJTBとJALとジャパントゥリスを受けて、一次は全部受かった。ジャパントゥリスは外国に行ける感じではなかったし、当時JALはジェット化以前でそれほど魅力を感じなかった。結局JTBの二次面接のときに、こういう組織（国際観光協会）もあるがどちらに行きたいかと訊かれて、どっちでもいいと答えたらJNTOに来たということです。当時JNTOの海外事務所

は4カ所（ニューヨーク、サンフランシスコ、ホノルル、トロント）あって、こっちの方がいいかなと思った記憶がある。

石井 山之内さんは？ まだ観光渡航はできない時代だったけど、就職前に外国に行かれた経験があるんですね。

山之内 入社については川井さんと同じ。外国に行けるところを望んでいたから。JTB を受けて一次が受かったあと、どちらに行きたいかと訊かれてどちらでもと答えたらこちらになった。上智大学時代にサイゴン大学との学生交換事業に参加して、カンボジアとヴェトナムに行った。

吉沢 僕は地理学専攻で JTB を希望して受験したけど、学校の先輩の稲場彰さんが JTA に入っておられたから、お訪ねしたりしてどういうところかわかっていた。営利目的の組織でないことも魅力で、問われた時、躊躇なく JTA でもいいと答えた。二次試験に受かったのは僕を入れて 24 人だったんだけど、あとで聞いたら JTA でもいいと答えた人は僕だけで、他には一人もいなかったって。全員がノーと答えたそうです。

塩沢 僕も外国に行きたかったのが理由。勉強した言葉を活かしたかったから、商社か JTB かと考えて JTB を選んだ。JTB か JTA かではどちらでもと答えた。3 人入ったけど、英語は当然として、ドイツ語、フランス語と、中南米に事務所を開設する予定があつてスペイン語を入れて各語 1 人ずつ採ったと聞かされた。上智大スペイン語科の同期生 3 人が JTB に入ったけど、1 人だけ海外旅行に回された。当時 JTB の仕事はインバウンドが花形で、アウトは観光渡航禁止時代で日の当たらないセクションだったから、海外旅行に行った友人がくさっていたのを覚えている。間もなく逆転することになるんだけど。

石井 僕はどちらがいいかと訊かれて、どんなところか訊いたら、生駒さんだったと思うけど、2 年後にオリンピックがある、海外事務所をどんどん増設する、その海外事務所の要員だと言われて、是非 JTA の方へ行きたいと答えて入れてもらった。当時（特）日本観光協会なんてほとんど知られていなかったわけだし、独自に募集しても人が集まらないから、JTB の受験合格者の中から採用するという方式だった。JTB 側は、合格者のうち行ってもいいという人がいれば好きな人をどうぞ、ということだったとあとで聞いた。

当時 JTB は株式会社化を控えていた時期（昭和 38 年に株式会社化）だったし、オリンピックは 2 年後に迫っており、海外観光渡航自由化も見えていた時期なので、大卒採用者を 90 人も採っていますが、川井さんたちの時はどうでしたか。株式会社化以後は別に財団 JTB の方の採用もあって、ちょっと人数の計算は複雑みたいですが。JTB の友人に訊いたら川井さんの年は 5 人、山之内さんの時は 7 人だったそうです。吉沢さんの年は 24 人でしたか。私たち昭和 37 年入社同期の船山龍二さんが社長になったし、コンベンション・ビューローに高橋茂さんと木村亮彦さんが出向してきたので付き合いがあった。船山さんはたしか ASTA の国際会議で一緒だった。

入社時の研修

石井 私たちの時は、入社前研修を JTB の人達と一緒に受けた。JTA の名札を付けさせられて、出来たばかりの大山の研修所の大教室での研修も受けた。西村さんという講師が、主要都市についてどこそこの角にタバコ屋があつてそこを右に曲がると何々があるというくらい勉強したといった話を聞いて、とてもついて行けないなと思った記憶があります。

先輩方の時はどうでしたか。

川井 僕の時はずっと研修なんかなくて、いわゆるオン・ザ・ジョブ・トレーニングだった。いきなり JTB の観光団の荷物担当バゲマス（バゲットマスター）をさせられた。ハワイからのグレン御旗（みはた）故国訪問観光団の添乗に駆り出された。メインのコンダクターは JTB 外旅の社員で、他に通訳ガイドがいたのかな、僕の仕事は荷物の管理。ツアー参加者の荷物をいつも数えているのが仕事で、旅行者が汽車や車で移動している間にカマタキといったって、専門の運送会社に荷物を先に運んでもらったりしていました。日系人グループだったけど、団長以外はほとんど日本語をしゃべらなかったな。

銀座の日本旅館を出発して鎌倉、箱根、名古屋（ノリタケに行ったのを覚えている）、京都と旅を続け、大阪につくと、さらにそれぞれが広島、熊本などの故郷に旅行するためグループは解散した。旅行中に親しくなった団員からリグレーのチューインガムやハーシーのチョコレート、セイラムなどの洋モク（これらは貴重品だった）を貰ったうえ、解散時に何と 1 万円のチップを貰った。初任給が 1 万 1 千 2 百円だったから正直嬉しかった。なお、後日貰ったセイラムをくわえタバコで東京駅の構内を歩いていたら、大蔵省の税関の役人だったかに呼び止められて、これは違法だと説教されて、持っていたタバコの箱も没収されちゃった。そういうわけで、JTB の同期入社の人のことは全然知らない。

石井 富士海外旅行の岡田信さんがガイドの時代、お金持ちのアメリカ人の家族を何週間かガイドして、1 千ドルのチップをもらって家が建ったという話は有名ですね。良き時代だったと言えるのかな。

山之内 僕の時是一緒の研修があった。5 日間くらいだったかな。木村重雄さん（後に JNTO 理事）の外国での話を聞いてかっこいいなと思った記憶がある。だけどその後 JTB の人と特に付き合いはなかった。吉沢君は一緒に研修を受けた同期の JTB の人と今でも付き合いがあるんだよね。

吉沢 入社前の 3 月に梅村総務部長名で、3 月初旬から JTB の研修に参加せよという手紙が来た。新宿にあったダイナースクラブの会議室で 1 カ月研修というのがあった。僕は少し遅れて 3 週間くらい参加した。周遊券の作り方などの実務研修も受けた。毎日うな井だとかいろいろ昼食付きで楽しかったです。講義が終わった 3 月 30 日にはその場からバスで 1 泊 2 日の研修ツアーに行きました。箱根の富士屋ホテルを見学し、箱根ホテルで洋式ランチの食べ方を教わった。熱海のニューグランド・ホテルだったかに泊まって、翌日は修善寺を見学し、川奈ホテルでフルコースのランチを食べ、ゴルフ場も見せてもらった。ホテルなんて中に入ったこともなかったからすごく勉強になった。

だからそのあとも同期 24 人が 50 年間月 1 回第 3 水曜日に会うということが続いている。一緒に国内旅行をするし、1997 年からは皆で海外旅行にも行くようになった。JNTO の理事になった橋本博之君が同期で、彼が言い出して台湾に行ったのが最初だった。その後交替で幹事を務めて、僕もヴェトナムとかに連れて行ったりした。これまで亡くなった人が 5 人います。

入社後の担当業務

石井 入社後海外事務所赴任までにどんな業務を担当されたのかという点をお願いします。

私が入社したとき、川井さんは結婚されたばかりで、結婚指輪をきらめかしてタイプライターを叩いておられた。トラベル・ニュース・ブレティンという英語の定期ニュースを書いていると言われ、蝶ネクタイ姿もすごく格好良かった。山之内さんは世界の観光業界の動向を紹介する小冊子「国際観光情報」の校正をやっておられたのを覚えています。そして松本常雄さんが協力宣伝担当で、毎日電話でべらべらと英語のやりとりしておられて圧倒されました。

川井 入社後すぐの業務がいま言ったバゲマス添乗だった。How to see シリーズなどの英文印刷物の作成、ニュースブレティンの作成、コレポン、添乗などいろいろやらされた。

山之内 まずコレポンをやらされたね。外国からの問い合わせのレターに返事を書く。川幡さん（当時外国部次長）が実に丁寧に直してくれて、英語の手紙なんかそれまで書いたことなかったから大変勉強になった。パンフレットはフランス語版やスペイン語版も作成したけど、僕が英語版を上智大の先生のところに持って行って仏文や独文や西文に翻訳してもらっていた。自分たちで企画して新しいパンフレットを作ったこともありました。

「国際観光情報」は外国の一流紙や観光専門紙誌を取っていて、それを多分外国通の理事や部長が読んで選択し、成城大学の加藤先生という年配の方に翻訳してもらって、それを僕が編集し、校正していた。

石井 国際観光情報の古い号の記事など読むと、よく集めてあるなあ后感心します。JNTOの強みは、海外事務所のネットワークなどを通じて集める観光関連の情報や調査・統計類を持っていることだと思います。

吉沢 まずコレポンをやらされましたね。1年間ずっとやったし、ほかにいろいろ上司や先輩に頼まれて雑用をやっていたという気がする。運輸省観光部には1日何回もお使いに行かされたなあ。2年目に入るとJTB本社5階のオフィシャルガイド編集室に勤務替えで行かされた。地図担当の藤野さんの手伝いとかいろいろな雑務をやらされた。僕の少し後に小野口さんが入ってきた。そして1年くらい後に小谷ビルの3階に移転したんだと思う。

石井 お使いねえ。運輸省、国鉄、JTB、ホテル協会、その他あちこちに、これ持って行けあれ貰って来いってしょっちゅう出されましたね。そんなことをしているうちに人を覚えて親しくなったりした。西川さん、浜野さん、池田さんなど、のちにJNTOに来られた人たちとは、だからずっと前から知っていた。

塩沢 雑用で思い出したけど、当時のコピー機は現在のとは雲泥の差の代物で、コピーとり自体が大変な作業だった。コピーができる半透明の業連用紙などに書けばアオ焼きでとれたけど、普通の資料は液体を通して一枚ずつ透明な用紙をつくり、それをコピーするという極めて原始的もので、取られるコピー枚数が多いと半日かかった。手が汚れるし、コピー取りは大変な業務だった。雑用係なんていなかったから、これらは入社したばかりの新人の仕事だった。更に、雑用と言えば、新人時代出勤前の全職員の机の上や椅子を雑巾がけさせられたよなあ。

石井 コピー取りか。僕は島田克三さんに懇切丁寧に教わった。机の雑巾がけは多分矢吹君くらいまでだったと思うけど、彼はぼやきながら手際よくやっていた。

入社について稲場さんには別にお訊ねしたんだけど、吉沢さんと同じで地理学専攻だったからJTBに入りたくて受け、どちらでもよかったからJNTOに入ったそうです。入社後について紙面参加してもらったこんな風です。

稲場 最初から内国部（統合前の全日本観光連盟の業務が中心）に配属され、年1回の総会や支部の会議、観光地診断とか観光夏期大学その他の国内観光行事で日本中に出張し、大いに勉強させてもらった。ただし、インバウンドの中の外客受け入れ対策事業は内国部が担当することになっていたの、外客のための案内所(TIC)の創立が大きな仕事だった。水野次長とJTBから来ておられた田敏夫さんといっしょにTIC東京(昭和37年12月開設)を手がけた。場所探しはいろいろしたけど、そもそも当時ビル自体があまりなくて(ソニービルなんかも存在しなかった)、小谷ビルのほうから公的な組織のJNTOに入ってくれと売り込みに来た。管理している小母さんがやたらうるさくて、トイレをきれいに使えだの、遅くまで残業していると表の入口のドアに鍵をかけられて出入りが出来なくなり、地下2階だったかな、ボイラー室を通り抜けて出入りさせられた。

続いてTIC羽田(昭和38年11月)、TIC京都(昭和39年3月)の開設事務をやった。ただし、昭和39年3月に香港事務所に赴任したので、最後にできた京都TICの開設披露パーティには出ていない。

石井 僕は37年入社で、1週間だか2週間だかずつ経理部、総務部、国際部で入社研修を受けて、多分5月から業務部(内国部から名称変更)に配属された。6月にTICのカウンターに立つ職員が6人採用された。当時の名前と言うと入江さん、川北督子さん、中路徐子さん、鯉沼さん、三田さん、新井さんだった。僕は同期の新入りだったのにその研修を担当させられたから、倍のスピードで物事を覚えさせられた。観光部から来られた国井富士利さんの紹介で帝国ホテルを筆頭に出来たばかりのホテルオークラとかを視察で回りました。国井さんが連れて行ってくれるのではなく、しかるべき人に連絡してくれて僕が一人で案内するわけです。なにせホテルなんてそれまで中に入ったこともない人間だから、表面は平気な顔して担当の方に案内してもらったけど、内心はびくびくしていた。真夏で上着なしだったから、ダイニングルームで昼食を頂くとき上着なしでは入れず、黒い上着を貸してもらった。高級な洋食など食べたことなかったから、TICの人達に説明などできるわけなかった。この研修だったかなあ、国際観光ホテルで昼食を食べた時、デザートに桃が出て、ナイフとフォークしか置いてない。どうやって食べるのかわからなくて往生した。ナイフで少しずつ切って食べるんだと教えられた。でも東京TICでの経験があったから、京都TICの研修の時はかなり落ち着いてやれました。

稲場 研修といえば、通訳案内業試験に受かった人たちを対象とする研修もあったね。ガイド試験に受かったといっても、ホテルや洋食に馴染んでいる人ばかりではなかったから、観光部が行う研修にわれわれも参加させられた。外人向けのコースをバスで回りながら、ベテランガイドが英語で模範説明というのをやって見せてくれた。グリーンさん(緑川さん)とかが英語の冗談を交えて面白おかしく実演してみせてくれた。

石井 僕も入社してから2~3回ガイド研修に参加しました。のちに富士海外を起こされた岡田信さんの車中講義には感心しました。どうやって勉強するんですかって訊いたら、平凡社の百科事典を1ページから全部読んだんだって。考えてみれば業務部に配属されたのは恵まれていたらしい。観光夏期大学に行かせてもらったり、ツーリングラリーとかいって24時間の関東地区一周の自動車ラリーには日本観光協会代表で参加し、審判車に乗せてもらって関東を一巡したりした。悪路で夜通しだったからふらふらになったけど。

稲場 新幹線の土台固めのために、開業前に招集されて何度か試乗させられた。家内はモ

ニター役を頼まれていろいろ開業まで協力していた。開業パーティで飲めないお酒を飲んで倒れるというハプニングもあったけど。

石井 業務部は全観連の事業を引き継いでいて社団的な会員組織が残っていたから、総会とか支部総会とかがあった。稲場さんはこういう会議への参加や観光地診断、国土美化運動、洋式トイレ整備事業とか、いろいろな事業で日本中を回ったという話を聞いて羨ましかったです。

昭和 39 年に（社）日本観光協会と再び分離して特殊法人国際観光振興会に組織変更になったあとは、国内の観光機関との関係が切れて、接触の機会がなくなりました。私たちは国内の観光諸機関と強いつながりがあった方がいいのと思ったし、部の上の人達もそう言っていたけど、国庫補助金中心に運営されている海外宣伝事業と会員制度に支えられている全観連の体質は違うので、その矛盾が出てきてわずか 4 年でまた別れることになった。この話は梶本元 JNTO 会長がその苦労話を「観光よもやま話」に書いておられます。

稲場 鉄道電話（通称鉄傳というのが業務部にあった。当時市外電話は交換台に頼んで繋いでもらうしかなく、結構待たされた。国鉄の関係事務所ということで運輸省の配慮でつけてもらっていた。地方との連絡に大変便利だった。

石井 TIC 京都にもつけてもらいましたよね。これが（特）国際観光振興会になって国内観光と分離したときに外されて不便になりました。業務部の人間は分離反対という意見が多かったし、私も地方の観光協会や関連業界との関係が薄れるのはマイナスだと考えていましたけど、後に外国の政府観光局の在り方などをいろいろ勉強してみると、やはり必然の方向だったんだと理解できました。

本部事務所と当時の人々

川井 本部の事務所は東京駅八重洲口の国際観光会館最上階の 8 階にあった。通路を隔てて総務部と役員室と小会議室があった。8 階にはほかに日本温泉協会とか日本観光旅館連盟があり、通路のどん詰まりにはイギリスの保険会社があって、スマートなイギリス人らしき西洋人が出入りしていた。エレベーターの前に観光クラブというカフェ・ラウンジ式のレストランがあって、そのメニューに JNTO の理事だった横田さんにちなむスパゲッティ・ヨコタ（スパゲッティの上にポークカツが乗っていた）というのがあったな。囲碁や将棋の盤もおいてあって、好きな人は結構楽しんでた。

僕が入った当時は総務と経理のほかに外国部と内国部があって、外国部長が岩田一郎さんで、次長に安居院さん、松田さん、川幡さんらがいた。内国部長は出口一重という人だった。総務部長が池田一郎さん、経理部長は箕輪登さん。

山之内 外国部には「島」が 3 つあって、窓に向かって左が部内庶務とか事務所事業の管理と支援を担当していた。ボスが川幡千春さん。渡辺幸雄さんや中村雅雄さんがいて、多分編集の管理事務と映画製作を担当していた海藤馨さんもこの島だったような気がする。真ん中の「島」が展示催物をやっていた吉田登さんがボスで、協力宣伝の松本常雄さんがいた。右の島がジャパントイムスから来た松本正三さん（通称先生）が課長で、われわれはその下で宣伝印刷物を作っていた。清水知子さんがアルバイトとして来ていたね。でも座席の位置などはよく覚えていない（はっきりしたことは誰もわからなかった）。

塩沢 国際観光会館の半分は国際観光ホテルで、たまにホテルの 2 階のレストランで食事

した。6階と7階にはジェトロが入っていた。大学の2年先輩が居たから、労組を作るときに相談に乗ってもらったね。ジェトロの争議では赤旗などを張りめぐらして凄かった。

川井 5階に日本棋院があった。海外技術協力事業団（JICAの前身）も同じビルじゃなかった？

石井 海外技術協力事業団は1962（昭和37）年の設立ですね。しばらくは国際観光会館に居たのですか。入社したての頃事業団の若手職員が時々JNTOのパフレットをもらいに来た。われわれが労働組合を作った頃（1967年）、事業団の組合が大きなストライキをやって、虎ノ門だか赤坂見附だかに応援に行ったのを覚えています。3～4階は県の観光事務所が入っていたはずですよ。

塩沢 国際観光会館からガード脇の小谷ビル3階に編集部が移ったのはいつだったっけ。

石井 新築の小谷ビルの1階にツーリスト・インフォメーション・センター（TIC）をオープンしたのが昭和37年の12月17日だから、同じ時期のはずですね。オープンしたばかりで内装工事の火花から火事になって1階のTICが消火水で水浸しになった。本部から皆して駆けつけて、備品類や資料類をガード下に緊急避難させた。この時は正式の引き渡しを受ける前だったので修理は建設会社の負担でやってもらった。結局業務再開は年明けになりましたね。

2階には「観光ライブラリー」があって英語の日本紹介図書なんかは沢山置いてあった。記録を見ると、ライブラリーは外人観光客に使ってもらうのが目的とされていたけど、TICで外客に利用を勧めたりはしなかったし、実際に外国人が使ったということはなかったと思う。むしろ日本人の研究者らしき人たちが調べ物をしに来ていたようで、「日本観光協会のあゆみ」に利用者の数字が載っています（のちにライブラリーは観光資料室に変更。）

38年度入社の矢吹君に訊いたら、彼が入社した4月1日にはすでに小谷ビル3階に編集部とJTB本社ビルの5階にいたオフィシャルガイドの製作スタッフ、それに鈴木寿さんを長とする調査室が入っていたって言っていた。38年4月1日に日本観光協会法が一部改正され、組織規程が改正されているから、多分この時に編集部や調査室ができ、人が増えるのが決まっていたので、4月1日の直前くらいに移ったということらしい。

塩沢 本部が国際観光会館から交通会館の10階に移転したのはオリンピック東京大会（1964年）が終わった翌年の昭和40（1965）年8月1日だ。堀木副会長が39年4月に着任されて、その力が大きかったと聞いた。引越しが大変だったという記憶がある。

川井 僕はニューヨーク事務所にいたから遠くで眺めていた感じ。

石井 僕はオリンピックが終わって事業部（国際部）に移動して事務所開設の仕事をしていたら、任意団体日本コンベンション・ビューロー設立事務を命ずという辞令をもらって逆に財団JTBの中に設置された日本コンベンション・ビューロー準備事務室に行った。栗原孟男さんがボスで、JALから柴田実さん、JTBから瀬崎さんという方、そしてJNTOから私が出向して日本コンベンション・ビューロー設立準備に当たりました。昭和40年6月に小谷ビルの2階のライブラリーのスペースに事務所を置いてスタートしたから、引越しには関わらなかった。翌41年4月1日にJNTOが日本コンベンション・ビューローを吸収したため東京交通会館に移った。

思い出す人々

石井 これまで名前が出てなかった人たちとか、とくに思い出深い人という？

川井 渡辺幸雄さんと中村雅雄さん。直接の先輩といえはこの二人だけという気がしていた。渡辺さんは戦後英語が出来たから駐留軍で働いていたと聞いたことがあるし、そのあと神田外国語学校で先生をしておられた。僕の家内が英語の話せる電話交換手として JNTO に入社したんだけど、渡辺さんに習ったそう。松本正三さんの縁で来られたと聞いている。

中村雅雄さんは僕より 2 年前の昭和 32 年に（財）国際観光協会に入った大卒の人。あの人の入社事情は知らないな。

石井 お父さんが国鉄とかで JTB を受験したけど、まだ JTB も大卒採用はほんの 2～3 人という時代で入れず、国際観光協会が言葉の出来る人が必要だったから採用されたと聞いたことがある。

川井 総務部だと梅村部長、大林正二次長、江原さん、生駒さん、八幡さん、平山さん。女性では重武さん。

塩沢 菅洋子さん、川井夫人の後任の電話交換の立石まりちゃん、土産品協会の富永さん、真野さん。

山之内 国際部の窓際に美術の曾称弘さんと写真の吉村力郎さん、英文タイプの高橋さん、和文タイプの天満さんがおられた。

石井 業務（内国）部は僕が入った時の部長が五十嵐勇さん、次長が水野衛さん、それに全観連から移籍してこられた高橋進さん、鈴木寿さん、小峰さん。ほかに田さん、島田さん、国井富士利さん…。

経理部には最初に研修配属されたのでよく覚えているけど、部長が小泉兵助さん、佐藤智三郎次長、湖幡さん、山本阿久利さん、和田耕一君、小笠原節ちゃん。

塩沢 役員は間島さん（総務）、市川さん（経理）、久田さん（のち木村重雄さん）（国際業務）。小金井さん（国内業務）それに監事が横田巖さんだった。

川井 会長は日商会頭の足立正さん、副会長が平山孝さん。あの頃の忘年会は立派なホテルなどでやっていて、こういう偉い人たちも出席していたのを覚えている。

オリンピック 1964 年大会当時

石井 上野目昌市君と柿崎隆男君が昭和 39（1964）年 4 月入社だから、オリンピック大会前の新卒入社は彼らまでです。そこでオリンピック開催までどこの所属で何をされていたのか話して頂けますか。ちなみに、昭和 38 年に中途採用の即戦力として佐久間健治さん、木村佳男さん、竹之下正義さん、黒須淇一さんらが入って来た。泉勇治さん、利根山さんもそう。オリンピック後の昭和 40 年の定期入社は永見正敏君が一人だけだった。ついでに永見君に訊いたら、彼は矢吹君の後輩で事前に JNTO のことを知っていて、JNTO 独自の入社試験を受けたそうです。矢吹君も同じらしく、37 年組のあとは JNTO 独自の採用試験になっていたらしい。

川井 僕は 38 年 8 月にニューヨークに行ったから、海外でオリンピックの宣伝活動をやっていた。メディアの訪日にいろいろ協力した。

石井 稲場さんは TIC の東京、羽田、京都の開設事務を担当されて、39 年 3 月に香港事務所に赴任されたから、同じく海外での誘客活動中だったそうです。話を聞いたら、聖火リ

レーの時に香港が台風に襲われて3～4日飛行機が飛ばず、関係者がえらく困っていたという話をしておられた。山之内さんはどうでしたか。

山之内 僕は編集部で印刷物の作成をやっていた。オリンピック開催には直接かかわるということにはなかったね。2年後の昭和41年6月にパリに赴任した。

石井 本部でのオリンピック対応は主として受入対策で、業務部の所管になっていた。最大の仕事はTIC開設と運営だったんだけど、ほかに宣伝用のパンフレットでなく、到着後の外客のための実用情報を盛り込んだパンフレットを作れと言われて、稲場さんと二人で作った。国際部（編集部）でつくるパンフレットは宣伝用で、来日してから必要な情報は少ないから、着地情報主体のパンフレットを作れということだった。外客になったツモリで空港に到着し、タクシーかバスで都心に来て…と、到着から帰国までの行動をあれこれ考えて細かな情報を盛り込んで作成した。Information for Tourists to Japan というタイトルのグリーンのパンフだった。みなさんに褒められたんだけど、あれ残っていないかなあ。

それからオリンピック前にということで、免税品の範囲拡大をするようにと観光部業務課から指示されて、土産品協会の富永さんに紹介してもらって事実上一人で店舗を回り、売れ筋の商品を訊いて、免税品にする対象の品をリストアップした。新入生にやらせる仕事かよって思ったけど面白かった。

あとグッドウィルガイド（善意ガイド）のバッジを作りましたね。記録を見ると、8か国語を別々に募集して、全部で2万5千人に配布したって書いてある。こげ茶色のバッジで、E（英語）とかF（フランス語）とか言語を示す文字が入っていた。昭和39年だから国際観光振興会になっていたからもう業務部はなく、国際部（事業部になっていたかも）が扱った。凄く応募が来ましたね。強烈に覚えているのはポルトガル語だったと思うけど、おじいさんがやってきて、ひょっとしたらブラジルに残してきた家族がオリンピックを機に来日して会えるかもしれないからバッジをつけて歩きたいと、涙を浮かべて希望された。ボスの八幡得一郎さんに相談したら、上げちゃおうよといって審査抜きであげたと記憶している。

参加者紹介（最初の赴任事務所とその時期）

川井仁史 昭和34（1959）年4月入社、ニューヨーク事務所（昭和38年）

稲場 彰 昭和34（1959）年4月入社、香港事務所（昭和39年）

山之内保 昭和35（1960）年4月入社、パリ事務所（昭和41年）

吉沢新一 昭和36（1961）年4月入社、バンコク事務所（昭和43年）

塩沢 潔 昭和37（1962）年4月入社、サンパウロ事務所（昭和43年）

石井昭夫 昭和37（1962）年4月入社、パリ事務所（昭和45年）